

2型糖尿病患者の心理的柔軟性とセルフケア行動の関連

大屋藍子^{1,2}・槇野久士²・細田公則²・孫徹²・椽谷真由²・玉那覇民子²・大畑洋子²・肥塚諒²・松尾美紀²・河面恭子²・藤井紀子³・金子春恵³・福島佳織³・前川由紀子³・河合幸枝³・万福尚紀²・武藤崇⁴

1. 神戸学院大学人文学部
2. 国立循環器病研究センター動脈硬化・糖尿病内科
3. 国立循環器病研究センター看護部
4. 同志社大学心理学部

目的

本邦における糖尿病患者の糖尿病に対する心理的柔軟性を調査し、その特徴とセルフケア行動との関連について検討を行った。

方法

国立循環器病研究センター動脈硬化・糖尿病内科に通院・入院している2型糖尿病患者を対象とした質問紙調査を実施し、131名から回答を得た。指標は、生理指標（HbA1c, BMI）、セルフケア行動指標（SDSCA 食事・運動）、摂食行動指標（DEBQ 抑制・情動・外発）、糖尿病に対する心理的柔軟性（AADQ）、糖尿病治療負担（PAID）、心理的柔軟性モデルの各反応スタイルの程度（CFQ7 項目版, MAAS, VCQ）を用いた。本研究は、国立循環器病研究センターの倫理審査委員会で承認を受けて実施した（研究番号 M28-131）

結果

1. 糖尿病に対する心理的柔軟性の違いから見たセルフケア行動と摂食行動

AADQの標準平均値から±1SDを基準として、糖尿病に対する心理的柔軟性高群と低群に分け各指標の値を比較した。その結果、糖尿病に対する心理的柔軟性低群の方が、治療負担、情動的摂食、外発的摂食の値が高かった。生理指標に差は見られなかった。

2. 心理的柔軟性モデルの反応スタイルの組み合わせ別に見たセルフケア行動と摂食行動

MAASとCFQと、VCQの行動継続因子を用いて、Ward法による階層的クラスター分析を実施した。そこで得られた3つのクラスターを行動苦悶型、非行動型、行動柔軟型とし（各クラスターにおけるMAAS, CFQ, VCQのZスコア平均値は、-0.9, 0.94, 0.63; -0.30, -0.04, -0.9; 0.63, -0.90, 0.44）、各指標の値を比較した。その結果、各スタイルで生理指標に差は見られなかったが、行動苦悶型が非行動型と比較して運動習慣得点が高く、一方治療負担や情動的摂食、外発的摂食の値が行動柔軟型よりも高かった。

考察

糖尿病に対する心理的柔軟性が低いと、治療負担や問題となる摂食行動が多くなることが示された。この結果は、先行研究を支持した (Schmitt et al., 2014)。また、価値に沿った行動継続が高い場合運動の実行率が高くなった。しかし、たとえセルフケア行動が生起していたとしても、認知的フュージョンが高くマインドフルネスの低い状態で治療を行うと、治療負担や問題となる摂食行動へと繋がってしまう可能性が示唆された。